

『私の人生 その九』

日本を美しくする会
相談役 鍵山秀三郎

51億から上場企業の原動力①

これは多分に幸運がありましたね。決して私の力ではありません。謙遜ではないですね。別に私でなくてもできたこと、ただ、私ができないこともあるんですね。それは何かというと、イエローハットという会社はただ単に売り上げを上げて、利益を上げただけではない。ちゃんと社会に掃除というものを広めながら、学校へ行って一円にもならないことを、逆に費用がかかるんですね。大勢の人が道具を持って行って、すべての費用はこちら持ちでやってるわけですから、日本を美しくする会ができて日本中にその活動が広まってきた、その母体となったのがうちの会社、イエローハットです。ですから、ただ単に利益を上げて四季報に載ったというだけではないんです。それなら他の人だってできるんです。私は他の人にはできないこともやってきたわけですね。

51億から上場企業の原動力②

これはお客さまを大事にしたということです。それでお客様がこちら（イエローハット）を喜ばせようとして、イエローハットから一円でも多く買いたい、そういう気持ちですね。お客様がうちの会社を育ててくださった、大きくしてくださいなんです。私がいくらがんばっても一人の力なんて知れていますけれども、有力なお客様がうちからものを仕入れることで、私を喜ばせようとしてくださっているんです。お客さまがどうしたらよくなるか。お客さまをよくしたら、必ずこちらも良くなってくださるんです。ところが今は自分の利益を優先してしまっていて、口では「お客さまは神さま」と言いますが、本当にそうやってる人はいるのかなぁ・・・?と思いますね。

上場までの道のりの苦労は

上場時の売り上げは八百数十億になってたと思います。そこに至るまで、ある意味ではリスクも背負いました。たとえばお店を拡販するにあたって、土地を借りるところがなければ、土地を買ってやらざるを得ない。土地という資産があっても、一方ではそれに匹敵する借り入れも発生するわけですから、そういうリスクをどこまで経営者が負えるか。そこまですてやりたくない。私と同じ時期に始めた人も、ずーっと誰かの建物を借りて終わってしまったところもありましたね。それはそこから生み出す利益の享受だけ受けて、リスクは負いたくないということですね。私の周りにはそういう方がいっぱいいます。私は社員の人たちが誇りを持って仕事ができる、そういう施設を作る。お客さまが今、零細な仕事をしている、この人に大きな舞台を与えてあげたい。こちらでその舞台を用意して、その人に舞台の上で演じていただく。それで成功した例もありましたね。基本は「どうしたら人を喜ばすことができるか」ということが前提になってやってきました。人間は自分の得にならないことをしたときに成長するんです。反対に自分の得になることしかやらない人は、人間としての成長は望めないですね。藤沢周平という人が書いた本の中に、「飯の糧にならないことが心の糧になる」。短い言葉ですが、これが正にそのことをいっていますね。それから紀元前五百年に亡くなった中国の晏子^{あんし}が言っているんですね。普通の人は、『益がなければ意味がない』、自分にとって益のないことは意味がないと言っているんです。晏子は『益はなくとも意味はある』という道を選んだ人です。ですから二千五百年も経った今日でも、日本でも嬰嬰（あんえい）と言えば多くの人が知っていますね。

便教会新聞

第 141 号

平成31年新年

Never Give up!

便教会は、教師の教師による教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めることを目的としています。

便教会新聞発行責任者 高野修滋

〒四四五〇八〇二

愛知県西尾市米津町天竺桂二七

TEL〇五六三ー五六一四三二七

携帯 090-4215-1727

高野修滋 拜

『十年目を前に気付いたこと』

(愛媛県) 新居浜市立泉川中学校
教諭 越智 誠司

朝清掃を始めて、今年で十年目になります。毎日続けてこられたことに感謝します。

平成二十二年四月、前任校で生徒指導主事を拝命しました。当時の勤務校は夜中に窓ガラスが何枚も割られたり、教師に対する暴言や授業エスケープが続いたり、校外での生徒の傍若無人な態度にクレームの電話が毎日のように鳴るなどの荒れた学校でした。また、私は女子バレー部の顧問となりましたが、訳有りの集団で心も荒んでおり、指導に困って全身に蕁麻疹ができるほど悩んでいました。そんな状況でしたから、生徒指導主事として何から始めていいのかわからず、不安だったのを覚えています。

「自分に何ができるか？」私は考えました。そして思いついたのが「毎朝、気持ちのよい環境で生徒を出迎えよう」ということでした。七時前から玄関周辺を掃除することにしました。私は元来熱しやすく冷めやすい人間なので、何が何でもこの朝清掃だけは続けようと心に決めました。毎日続けていると、いろいろな気付くことがありました。特に感じたのは、学校が大変汚れているということ。それまでの自分には見えていなかった。こんな環境では子どもたちの心が荒んでいくのも無理はない」と反省しました。

冬になった頃、書店で鍵山相談役の「掃除道」が

目に留まり、便器を素手で磨くことに挑戦して

大して変わることはありませんでした。同僚は「毎日続けるなんてすごいね」と言うものの、誰一人

いっしょにやろうとする人はいませんでした。バレー

部員は相変わらずでしたし、「ゴミはすぐに落ちるの

に、なんで掃除なんかするん？」と、半ばバカ

にしたような感じで私を見ていました。正直、「悔

しいなぁ」と何度も思いました。でも、やると決め

たことです。自分に負けたくなかった私は、とにかく

掃除を続けました。そんな毎日が続きましたが、

転機が訪れました。冬休みに入っすぐ、練習の前に

私が職員トイレで便器を磨いていると、人の気配

がしました。振り向くと部員たちでした。「みんな

もやってみるか？ こうやってやるんじゃ、見て

み！」とトイレに誘いました。私が便器に手を突っ

込んで磨くのを見た瞬間、「ありえんよねー！」

と叫ぶ彼女たち。しかし、間髪入れずにそれぞれ担

当の便器を決めていき、「じゃあ頼むぞ。今日の練習

は目の前の便器をピカピカにすることな！」とだけ

伝えて、私は自分の便器へ。すぐにギャーギャー

という彼女たちの声が校舎中に響きました。叫び声は

しばらくの間続きましたが、いつの間にか静寂へ。

シュッ、シュッ、シュッという便器を磨く音しか聞

こえなくなったのです。三時間後、ピカピカになっ

た便器を誇らしげに見せる彼女たち。「爪を使った

【編集後記】地元のホームニュースに「西尾を美しくする会」の活動が紹介されました。取材を受けた

際、担当記者の言葉にハッと、楔を打ち込まれました。それは、誰もがよく使う言葉ですが、取材記

者から「今後の活動目標 抱負は」と聞かれ、私の

想いを話したときに返ってきた言葉です。その記者

は西尾市出身の著名人を多く取材していて、昨年中

日ドラゴンズを引退した岩瀬仁紀投手が地元の小学

生から「どうしたら、岩瀬選手のようになれるん

ですか？」の質問に、岩瀬選手は「目標に向かってあ

きらめないこと」と語ったそうです。取材を受けた

著名な方は皆、「夢を実現するにはあきらめない、

それに向かって努力する」ことが大事だと話される

そうです。この編集後記でも「小さくコッコッ」、「微

差僅差の積み重ね」と続けることの大切さを自分に

言い聞かせてきていますが、「あきらめない」には、

しぶとさ、粘り強さ、根気強さが感じられ、新たな

やる気スイッチがオンとなります。心の中のどこか

に、毎月の掃除を消化すればいいという情性的な面

があったかもしれせん。目標を意識して一歩ずつ

進む力を生み出す言葉、『あきらめない！』をいた

だけたことに感謝します。第22回愛媛便教会では、

県内外から先生、生徒、掃除に学ぶ会の皆さまが多

数応援に駆けつけてくださり、主催者、世話人が感

動で言葉を詰まらせていた姿が感動的でした。会場

校の新居浜市立泉川中学校は素晴らしい学校です。

私の知る限りでは日本一です。掃除の魅力を伝える

ことは易しいことではありませんが、そこにはやり

がいがあり、感動があります。四国にはお遍路八十

八カ所がありますが、掃除八十八カ所(学校)プロ

ジェクトがスタートしました。既に四校が決まりました。

「あきらめない」それは、「燃える青春」です。

今年もワクワクがいっぱいです。

翌日、一生忘れられない日となりました。いつも

のように朝清掃をしていると、早く登校してきた主

将が言いました。「先生、私もいっしょに掃除が

したい。」飛び上がりたほど嬉しかったです。

あの子の主将の顔と言葉は死ぬまで忘れません。

その日からです。部員はもちろん、有志の生徒も加

わり、朝清掃をする生徒が増えていきました。休日

には校区に向いてゴミ拾いを行うようにもなり、

次第に地域の方々の評判もよくなっていきました。

二年後、バレー部はボランティア部とも呼ばれるよ

うになりました。それに比例するように戦績もよく

なり、たくさんのチームから練習試合を申し込まれ

る部になりました。数年前は態度の悪さから練習試

合を断られることも多かったチームです。夢のよう

でした。そればかりか、自校で試合がある日には「せ

っかく練習試合に来てくれるんだから、精一杯綺麗

にして出迎えたい！」と、早くから集まって念入りに

掃除をする部となりました。そんな彼女たち

を見て、私も「敷地内の全てを綺麗にする」と宣言

し、部員とともにこつこつ活動を続けていきました。

気が付くと、学校は大変落ち着いた雰囲気になっ

ていました。地域では「日本一、美しい学校」と喜ば

れるようになりました。また、不思議なことに、「先

生、俺変りたいんよ」と、やんちゃな生徒たちも

朝清掃に加わるようになってきました。そんな生徒

の保護者には「家でも応援してあげてください。朝早いですが温かく送り出してやってください。僕がいっしょに掃除をしますのでご心配なく」と説明し、連絡を取り合いながら彼らを支えていきました。「朝が来るのが楽しい。」心からそう思う毎日でした。

平成二八年四月、現任教へ赴任しました。着任の日から新天地で朝清掃を始めました。女子バレー部の顧問となりましたが、前任校での活動を知っていた当時の三年生たちは、何を言わずとも朝清掃に参加してくれました。「取り組んできたことは、場所が違っても伝わるものなんだ」と有難く思いました。ただ、私は全て自己流で掃除をやってきたので、「本物の掃除に触れてみたい」と思い立ち、『朴の森』で開催される鍵山教師塾に参加を申し込みました。初めてお目にかかる鍵山相談役のお姿、そして発せられるお言葉に、緊張と感動を覚えました。また、「やっ」と本物の掃除を学ぶことができる！」と安堵にも似た感情が湧いてきたものです。

翌日、改めて思い知ったのは、「掃除にマニュアルはない。大切なのは掃除にどう向き合うか」ということでした。やり方がどうのこうじゃなかったのです。「俺は掃除の何を学びに来ていたんだ？」と自分自身が恥ずかしくなりました。「方法論や技術や手法ではない。ただ身を低くして実践あるのみ」だということに、初めて気付くことができたのです。新居浜に帰ってから、以前にも増して積極的に掃除に取り組むようになりました。現任教には「開かずの間」がいくつもありましたが、バレー部員といっしょに次々と整理整頓を進めていきました。部員たちも自分たちの手で学校が綺麗になっていくのが嬉しかったみたいです。部活動が休みの日でも朝早くから自主的に登校し、掃除をする部員も現れました。一年も経つと「いつ来ても美しい学校ですね」と、地域や保護者、教員仲間から言われるようになりま

エンデ作）がある。主人公のモモと「時間泥棒」との戦いを描いた作品だ。今までの自分の教師の在り方を考える上でも、いろいろと考えさせられる内容が書かれている。その理由の一つは、資本主義社会のマイナス面が物語として提示されているからだと思う。そして、その社会の中で生きる私も、知らず知らずのうちに「当たり前」「よいこと」として生活し、子供と対峙していたからだ。・「ムダ、ムリ、ムラ」をなくし、何でも効率優先。・「進歩、成長、目標」にばかり目を向けることで、過程を軽視。

・お金などの数字を物差しにして、物事を割り切る。結果重視。

過去、教師として力のない自分をどうにかしたいと思いい、教育技術を学び続けた時期があった。そして、鍵山相談役の著書にも触れ、教室環境整備、教師修業、授業力をつけることで落ち着いた学級経営ができるようになった。しかし、気付かないうちに、「どうするとうまい授業ができるか」「テストで平均90点を超えさせる」など、「モモ」に描かれる大人たちのように「効率優先」「数字にこだわる」「はやく結果を出そうとする」ばかりとなり、子供達との心の距離は離れていく一方だった。時間泥棒と戦うモモの唯一といってもいい能力は「人の話を聞くこと」だ。これは、お金になるといいう意味での「得」にはならない。また、「生産性」という意味でも、「無駄が多い」と考えられやすい。しかし、話を聞いてもらう人々が笑顔とゆとりを回復していく姿はとても印象的である。翻って「教育技術一辺倒」になっていた私はどうだったか？子供達の話聞いていたのだろうか？子供達の姿をしっかりと見ていただろうか？

振り返ると、あの頃の自分は常に成功を求めてイライラしていた。常に効率優先で、様々な事を「ムダ」として切り捨てていた。それが、子供への態度として、指導として出ていた。例えば、子供達の思いに気付かず、自分の方針や考えを優先し、押し付けてばかりだった。

した。それがまた部員たちの「もっと掃除をしよう」という意欲につながっていきました。

しかし、いいことばかりではありませんでした。トイレ掃除を中傷されたり、「掃除ばかりして練習を全くしない」と教育委員会に何度も訴えられたり。「確かに掃除はするけど、どこの部にも負けないぐらい練習をしている。俺はバレーの指導を終えた後に仕事をやるから、毎日帰宅は深夜なんだ。それがわかって言っているのか？」と、歯がゆい思いをしたこともたくさんありました。「誰がそんなことを言っているんだろう？ まさか部員の保護者なのか？」と、考えれば考えるほど人間不信に陥りそうにもなりました。前任校では経験したことのない非難の声に眠れない夜もありました。それでも、「鍵山先生も十年間、たった一人で掃除を続けたのだ。それに比べたら自分なんか大した苦労もしていないじゃないか」と勇気を振り絞りながら毎日掃除を続けました。そこには温かい言葉も沢山ありました。勇気付けられることもたくさんありました。前任校ではずっと一人でしたが、本校ではともに掃除をしてくださる同僚に恵まれました。後押しをしてくださる地域の方や保護者もたくさんいらっしゃいます。また、愛媛には便教会がなく、どうしたものかと考えていた矢先、愛知から愛媛に帰ってこられた眞鍋裕介・真理子夫妻のご尽力により、昨年春に発足、絶妙なタイミングに驚きと感謝の気持ちで泣きそうになりました。便教会は月一回のペースで開催されており、私も時間の許す限り参加させていただいています。

そして、昨年十二月二十三日に開催された第二十二回愛媛便教会には全国各地から、志を立てて実践を続けられている信頼できる先生、便教会を応援してくださる『掃除に学ぶ会』の皆さまが参加されました。地元の同志やバレー部員とその保護者も多数参加していただきました。小山晃範先生のご縁で参加できた「便教会」である。子供達の声、その声の奥にある「心の声」を聞いてこなかった私にとって、便教会の反省会で出される、参加者の皆さんの言葉が新鮮だった。次のような内容があった。

・トイレ掃除をしていると、頭の中にあつた雑念がなくなっていく。手を動かして集中することで、頭の中が静まる。

・あちこちに気がいって手を出してしまいやすい私ですが、今日は一つの便器に向き合って、しっかりと掃除ができました。

・トイレ掃除で、今に集中できる。磨いている時、あれこれ思っていた事を忘れられる。

子供達は今、ここを生きる天才である。後先を考えず、今をいかに楽しむかで頭が一杯だ。そして、今に夢中になるからこそ魅力的な存在でもある。しかし、私は過去のことを後悔し、未来のことを心配し、不安になることで、「今・ここ」に集中できないまま、子供と接していた。だから、「子供の話聞けない」状態だったと気付かされた。「今を生きる」ことを忘れていたから、子供達との関係がおかしくなっていた。あれこれ考え、頭の中だけで生活しているため、存在感を失っていた。

一歩を踏み出すまでには時間がかかったが、多くの方のご支援、応援のおかげで、扶桑東小で行う便教会も24回となった。毎回、参加者の方の声と五感を通じた学

参加してくださいました。感謝の気持ちでいっぱいです。

最近、心底思うことがあります。「世の中に当たり前のことはひとつもない」ということです。掃除で考えると、毎朝私といっしょに活動してくださる同僚や生徒たちがいますが、決して当たり前ではないのです。毎日一緒に活動してくださるなんて本当に有難いことなのです。そのことによりやく気が付きました。この九年間を振り返ってみると、私は心のどこかで「掃除をしている自分はすごい」「掃除をしたから〇〇がよくなった」「こんなにいいことをなんでみんなは手伝わないんだ」と思ってきたのではないかと思えます。「十年偉大なり」という言葉もありますが、私の場合は「傲慢肥大なり」となっていたようです。どんなに「下座に生きる」なんて偉そうに思っている、実はいやらしい自分が見え隠れしていたのです。やっとなりに気付けたように思います。長い時間がかかりました。

平成最後の年、もう一度初心に返り、純粹な気持ちで掃除に取り組んでいきます。九年前の平成二十二年四月、そして「私もいっしょに掃除がしたい」と言ってくれた元主将の顔と声を礎に頑張ります。「二十年畏るべし」二十年目を迎えられる日を目指して、いらぬことは考えず、ただただ掃除に没頭していきたいと思えます。皆さま、どうぞこれからも指導よろしくお願い致します。

『学びを深める・広げる』

〜子供達とつながるために〜

愛知県扶桑町立扶桑東小学校
教諭 木原 勝利

児童文学作品の名著の一つに「モモ」(ミヒャエル・

びがたくさんあった。その中で、「ムダとして切り捨ててきたことの中にこそ、豊さがあった」幸せな未来は、今を犠牲にした先にはない」「目標にこだわるとノルマになり、楽しさが奪われる」ことを実感として学ばせてもらった。

こころ、4年間は、中学生を担任することが多い。高学年との違いはあるかもしれないが、教室の事務機の周りに子供達が集まるようになった。それは、何か作業をしている手も止めて、子供達の話、心の声に耳を傾けられるようになったからだ。子供達と冗談を言い合いながら笑っていられるようになったからだ。モモのように「話を聞く」ことに集中して、「無駄な時間」と考えなくなつたからだ。そして、子供達の話の裏側、どうしてそんな話をするのか、どんな思いがあるのか等、その子の背景に目を向けられるようになってきたからだ。このことも「目に見える部分だけの汚れを気にしてしましたが、目に見えない奥の方にも汚れがあることに驚きました。子供と接する時も、見えていない部分も気にしていなくてはいけないなあと思いました。」という仲間の声からの学びがあつてこそのことだ。

今後、AIが代わりに行う職業が数多く出てくると予測されている。しかし、人(子供)と直接関わることに意味がある教師の仕事自体はなくなりははずだ。逆に、今以上に子供達と真剣に向き合っていく力、関わっていく力が要求されてくる。子供達の気持ち、悩み、成長をつかむためには、教師自身が「気付く」力を上げるしかない。そして、その気付きをもとに子供達と向き合えないと、響き合う教育活動はできない。また、「今、ここを生きる子供」「ムダを楽しむ子供」と同じ感性をもち続けたいと意味ある教育活動はできない。子供を受け入れられる器の大きな教師になるためにも、今後も便教会での学びを深めていきたい。

第19回便教会総会は8月24日(土)〜25日(日)
「トイレ掃除は気づきの宝庫」

